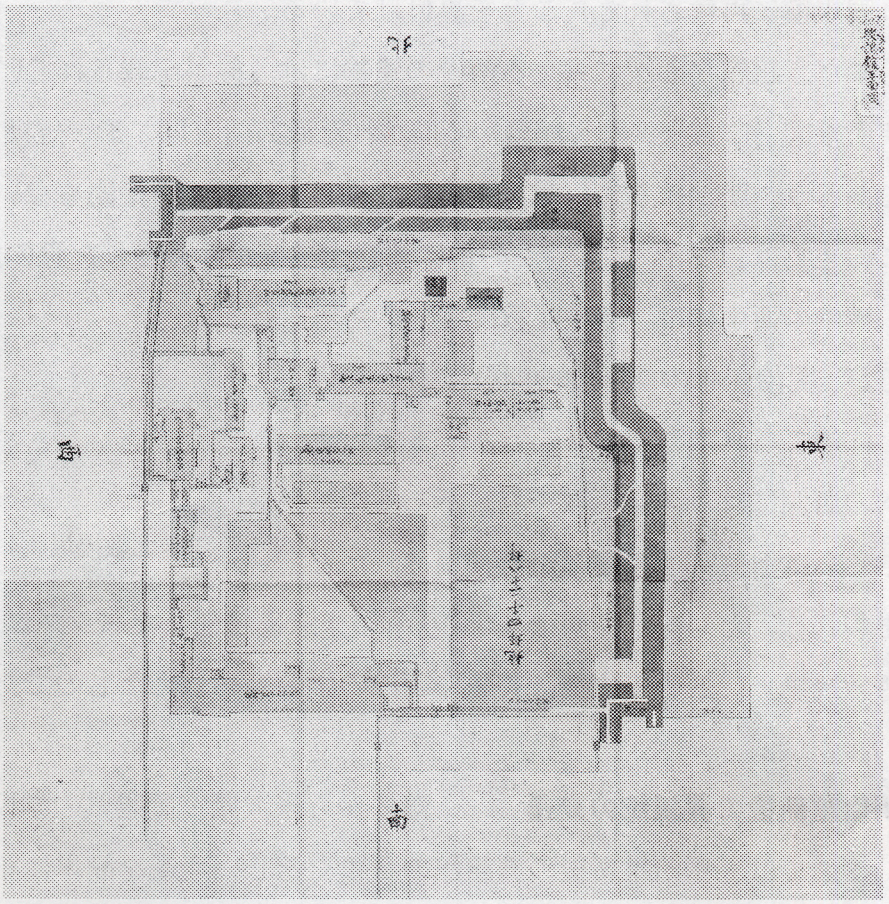
先人顕彰コーナー　「図書館の絵図展７　明治初期の興譲館平面図とC.H.ダラス」

令和３年９月25日～10月27日

興譲館平面図（明治初期）

岩瀬家文書４６０

７７.５㎝ × ８０㎝



明治初期の興譲館の平面図

ダラスが教えた洋学教授場が描かれる

付箋には「門東町下ニ存在セル興譲館平面図」と記される。

米沢藩の藩校・興譲館は、安永５年（1776）に元細工町（中央２丁目・現在の医師会館周辺）に開校した。元治元年（1864）の大火で類焼後は、武芸所が建っていた門東町御屋敷（中央１丁目・現市民文化会館やまちなか駐車場周辺）に再建された。

この絵図は、門東町に再建後の興譲館平面図であるが、北西にある建物は「洋学北教授場」と記載されるので、興譲館に洋学舎が置かれた明治４年（1871）以降の絵図となる。同年10月にイギリス人のチャールズ・ヘンリー・ダラスが洋科の語学教師として招かれ、この洋学北教授で教えたものと思われる。なお、ダラスの住居は学校構内に建てられたが、平面図にはダラス住居の記載がないので、明治４年の絵図とも推定されるが、ここでは明治初期の絵図として紹介する。

再建後の興譲館と武芸所と、明治初期の興譲館の姿

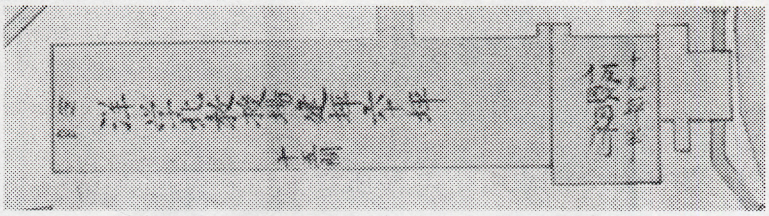
元治元年４月の大火で焼失した興譲館は、同年11月に門東町御用屋敷の地に、武芸所と共に再建されたが、元と同じ規模で再建されたと言われる。再建直後の絵図は確認されていないが、この明治初期の興譲館平面図によって、再建された興譲館及び武芸所の姿が類推できる。

安政４年（1857）の学館絵図（市立米沢図書館蔵）と比較すると、両絵図共に敷地の中央奥（三の丸土手の手前）に聖堂、その東側に御文庫（明治では「倉」）が置かれた。また、聖堂手前の建物は講堂で、食堂が連なる。講堂・食堂の東側には通学生が学ぶ友于堂が建ち（安政時は上等・中等・下等、明治期は上等・二等・三等に別れる）、西側には夫陣が建ち、南側には諸生（選ばれた

生徒が手当を受け寄宿）が寄宿する塾（安政時は二階建、明治時は平屋か）と、基本構造は同様で、「同規模に再建された」ことを裏付けている。

また、譲館平面図に見える南端の建物には名称が記載されていないが、文政 3 年（1820）の武芸所絵図（市立米沢図書館蔵）に描かれた武芸所と同じ形・規模で、武芸所として再建された建物であろう。明治維新後は武芸所という役目は終り、新築間もない建物たけが残されたと思われる。この建物は、明治 13 年、この地に興譲小学校が新築された際の用材に再利用された。

構内の西南には「洋学北教授場」が見えるが、明治 4 年の洋学舎の開設によって新たに建てられたものであろうか。また、構内の西側には「洋学西教授場」があるが、こちらは旧武芸所の建物が再利用されたと思われる。ともあれ、明治 4 年 10 月に米沢に赴任したダラスは、この「洋学北教授場」や「洋学西教授場」に於いて生徒に英語や西洋の学問等を教えたものであろう。



洋学北教授場　4 間×15 間、60 坪の教室

明治維新後の興譲館の変遷　　藩校から米沢県・置賜県の学校、そして私立米沢中学へ

ここでは、明治維新後の興譲館の目まぐるしい変遷を簡単に紹介したい。

明治元年の戊辰戦争時は全藩あげての臨戦態勢となり、興譲館の生徒は一時解散となり、興譲館の敷地は兵士の屯所となり、更には負傷した藩士を治療する病院に使用された。翌 2 年に興譲館は再開されるが、一方では医師を中心に英学（洋学）の重要性が唱えられ、次々と上京して英学を学ぶ者が増える中、明治 4 年 1 月に興譲館内に洋学舎が設立された。慶応義塾等から 3 名の洋学教師を招き、優秀な 75 名を選抜し手当金（年 10 円）を支給し洋学を学ばせた。

そうした中、同年 7 月の廃藩置県によって米沢藩は米沢県となり、興譲館の体制が大きく変化した。武士（士族）の学校から四民の学校となり、皇学・洋学・医学・筆学・数学の五科に改変された。更に 10 月には米沢県は洋学教授に英国人のチャールズ・ヘンリー・ダラスを御雇外国人として招聘した。ダラスの月給は 250 両（円）という高額であった。

同年 11 月には米沢県が置賜県と変わり、学校を維持する資金が不足となる中、児童は各地域に誕生した小学校の通うこととなり、皇学科と洋学科の 2 科に縮小し、手当金や定詰め学生も廃止となった。翌 5 年には「学制」や「中学教則略」の発布と全国的な教育制度が確立され、置賜県学の興譲館は名目上廃止となった。ただし、洋学科は外国語学校として存続、興譲館も縮小して継続して、同 7 年からは旧藩士協立の「私立米沢中学校」と改称した。明治 13 年に学校の南側（ナセ BA 周辺）に興譲小学校が建てられ、翌 14 年に米沢中学校は屋代町の旧置賜県庁舎に移った。